

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2012～2015

課題番号：24402025

研究課題名(和文) インドシナ稲作・精米・米輸出の150年と世界米市場

研究課題名(英文) 150-year history of rice production, milling and exportation in Indochina and world rice market

研究代表者

高橋 昭雄 (TAKAHASHI, Akio)

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号：90282706

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,400,000円

研究成果の概要(和文)：インドシナ半島は世界有数の米産地である。本研究では、現地語を駆使し、その主要国タイ、ベトナム、ミャンマーの米に関するフードシステム史を追求した。その全容を解明するには至らなかったが、タイでは、ジャポニカ米栽培の新展開、籾米担保制度の課題、タイで始まった香り米栽培インドシナ半島への拡大、ベトナムでは、南北ベトナム分断期稲作、ベトナム中部米穀産業の特徴、近代精米技術のインドシナへの導入による白米輸出化、ミャンマーでは、米の生産と輸出の130年史、精米所経営の実態、少数民族州での稲作について、それぞれ新たな地平と知見を開いた。また、米産業史に関するデータベース作成も進展した。

研究成果の概要(英文)：Indochina peninsula is famous for its long history of rice productions and exportations. We have studied food-system histories of paddy and rice in Indochina countries by making full use of Thai, Vietnamese and Myanmar languages. We have obtained new findings on the introduction of European rice mills to these countries, competition and cooperation in the world market of these countries, the histories of rice policies and their impacts, the expansion of Jasmine and Japonica rice varieties in the region, rice cultivations in unsurveyed areas, and the managements of rural rice mills. We have also collected and organized various economic and historical data related with paddy and rice in this region.

研究分野：経済学

キーワード：米産業 インドシナ 経済史 フードシステム 世界米市場 ミャンマー タイ ベトナム

### 1. 研究開始当初の背景

近年、食糧価格の世界的変動が問題になっている。2007～08年の歴史的な高騰の後、リーマンショックによる世界的景気後退の影響で価格は大幅に下落したが、その後、異常気象、新興国の需要増、投機資金の流入などで、食糧価格が高騰と下落を繰り返している。米ももちろんその例外ではなく、2008年、世界的に米価が急騰し、国際米市場は大きく混乱し、フィリピン、バングラデシュ、エジプト、西アフリカおよび中米の米輸入国に社会不安が広がった。それがまた繰り返される懸念は払拭されていない。

このように近年注目されつつある国際米市場の状況を踏まえて、世界有数の稲作地域であり、かつ主要米輸出地域でもあるインドシナ半島の3国、タイ、ベトナム、ミャンマーの米穀経済史を、フードシステムの比較経済史という新たな視点から捉えなおす、という着想に至った。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、世界有数の米の生産地であり、主要輸出地域でもある、インドシナ半島の米穀経済を比較社会経済史的手法によって分析することにある。

第一に、このフードシステムに関する3国の諸統計を時系列的に整理し、その150年の栄枯盛衰を比較検討する。

第二に、3国の輸出市場における競合と共存(棲み分け)について、アジア市場だけではなく、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、中東市場をも視野に入れて、その歴史的変遷を考察する。

第三に、市場の要求に対応した精米業の発展について、精米プラント技術や精米機製造業の競争を中心に3国の実態の比較を行なう。

### 3. 研究の方法

(1)本研究の研究対象はミャンマー、タイ、ベトナムのインドシナの米輸出国であるので、各国での米の生産、加工、流通、輸出に関する実態調査を最優先させた。

(2)とはいうものの、本研究の対象期間は150年にもわたる米経済史であるので、実態調査だけでなく、各国の資料館、米業者組合、農民組合、関係省庁等を訪問し、資料を収集した。

(3)また、ミャンマーはイギリスの、ベトナムはフランスの植民地であったため、独立以前の資料はヨーロッパ諸国に散在しており、イギリスやフランスでの資料調査も欠かすなかつた。

(4)上記の実態調査や資料調査で集めて資料や情報を年数回行った研究会で共有し、データベースの項目の統一化、各国のフードシステムの比較、実態調査で調べる内容の調整、さらにはその研究結果を報告しあつた。また同研究会に米の研究者や業者を招待し、米加

工技術や流通の実態について、ヒアリングを行った。

(5)インドシナ諸国の米産業との比較研究のため、アメリカ合衆国、イタリア、スペインを短期間訪問調査し、インドシナ諸国とは異なる世界の米事情について知見を得た。

### 4. 研究成果

(1)高橋昭雄は1880年代から現在に至る130年以上にわたって、ミャンマーにおける稲の作付面積、生産量、二期作化の進展、他作物の導入、米の消費、輸出等についての資料を収集し、データベース化した。研究分担者2名もこれに習って、タイとベトナムの稲作のデータベース作成を進めた。

(2)ミャンマーの精米所は設備が古く規模も小さく、ミャンマー米の輸出競争力不足の主因といわれてきた。しかし、その実態はわかっていなかった。高橋昭雄は1960初頭以降全く行われてこなかったミャンマーの精米所の経営調査を、コメどころのパテインで行い、論文を作成した。

(3)高橋昭雄は本科研費補助金で行ったミャンマー調査の副産物として、「高橋昭雄東大教授のミャンマー農村見聞録」をフジサンケイビジネスアイ紙上で37回連載し、現在も継続している。その中には、これまで調査されてこなかった少数民族州の稲作の実態調査も含まれる。

(4)高橋昭雄は、国際協力機構がミャンマーで行っている「農民参加による優良種子増殖普及システム確立計画プロジェクト」に2013年11月3日から27日まで短期専門家として招聘され、エーヤワディー管区におけるイネ種子の需要と供給の現状を把握し、生産計画と販売促進のための提言を行った。この提言をもとに、同プロジェクトは精米所を巻き込むことに舵を切った。この提言を作成する際に、本科研費での調査が大いに役立った。

(5)宮田は、国際会議The Rice Trader World Rice Conferenceに出席し、タイが先鞭をつけた「香り米」のインドシナ諸国への広がりについて、各国の精米・輸出業者との情報交換で確認した。さらに実態調査も行い、近年のインドシナ稲作の最大の特徴は、「香り米」の栽培の急拡大であることを発見した。

(6)宮田は、タイのインラック政権の籾米担保政策で生じている諸問題について、籾米を抛出した農民に対して、政府が売却代金を支払えない状況に陥っている財政上の問題の背景、政府が事実上買い上げた白米の売却問題、同政策が世界コメ市場に与える影響などについて分析した。

(7)宮田は、日本食の拡大とともに需要が増大し、インディカ米よりも高値で取引されるジャポニカ米への関心が高まりつつあるタイで、ジャポニカ米栽培の取り組みについて調査し、自然条件の制約や治水網等のインフラ条件の限界の他に、地場の精米業者・稲作農家との連携の難しさなどの複雑な社会

経済的な関係による制約もあることを明らかにした。

(8) 高橋壘は、多くの地域で米が主食ではないヨーロッパにおいてなぜ近代精米技術が生まれたのかという問題に挑戦した。ヨーロッパは意外にも稲作、米食の歴史が古く紀元前4世紀アレクサンドロス三世の東方遠征時に米が知られ、イタリアにて稲作が始まり、7~8世紀にはムーア人の侵攻とともにスペインに米作が導入された。つまり一定の米市場がヨーロッパに存在した。これに小麦の製粉技術の応用で、1850年ごろイギリスのダグラス=グラント社により堅型研削式精米機が開発された。これを機に発展したヨーロッパ精米業は、アジアから輸入された米の再精米を行い米市場を世界に広げた。しかしアジアでの精米技術の発展や輸送能力向上は次第にヨーロッパでの再精米、再輸出の重要性を失わせ、ヨーロッパ精米業を衰退させることになった。

(9) 上記に関連し、高橋壘は、第二次世界大戦前の主要米輸出地域であったミャンマー(当時はビルマ)、タイ(当時はシャム)、ベトナム(当時は仏領インドシナ)にヨーロッパより近代精米技術がもたらされることで、輸出米の白米化が進展したことを解明した。1920年代にはアジアにおける精米工場は現地人資本の参入が相次ぎ、それに伴い小規模化した。それを可能にしたのは小規模工場に適した精米技術の選択・導入があった。そこでは何より技術導入側である現地資本のアントレプレナーシップは大いに評価されるべきである、とする。以上の点は、フードシステム研究の間隙を埋める重要な成果である。

(10) 高橋壘は、仏領インドシナの米輸出に関する長期時系列を輸出米の形態(白米、玄米、粳、碎米等)で整備し、ビルマ、シャムとの比較を行った。それによりビルマ米、シャム米、サイゴン米の棲み分け、競合関係が明らかになった。特にサイゴン米とシャム米には輸出市場での競合関係がみられる。当時シャム米は一般に高い品質が評価されが、サイゴン米は低品質と評価された。サイゴン米は本当にシャム米と競合関係にあったのか、シャム米、サイゴン米価格の長期時系列を整備し、それらの相関を調べることで米市場統合の分析を行った。

(11) 高橋昭雄と宮田は、2013年にアメリカ合衆国ルイジアナ州で、高橋昭雄と高橋壘は、2014年にイタリア・ピエモンテ州で、2015年に、高橋昭雄、宮田敏之、高橋壘はスペイン・バレンシアで、米産業の短期調査を行い、インドシナ諸国との比較、アメリカとヨーロッパの稲作史、米に関わるアジアとアメリカおよびヨーロッパの交渉等について学んだ。これらの調査を機に、宮田はルイジアナの「ジャズメンライス」とタイの「ジャズミンライス」との関係について、高橋壘は精米機製造業や化粧米を通してのアジアとヨーロ

ッパの交流と競争についての研究を行った。どちらも前人未達の分野である。

(12) このように3人とも従来行われてこなかった研究にそれぞれ挑み、新たな発見、そしてこの地域の研究史への多大なる貢献をしてきた。しかし、当初目的としていた、150年にわたる米産業のフードシステム史の全容の解明、および視点を完全に統一した横並びの比較研究には至らなかった。各国の資料残存状況、データの不統一、各国の政治制度や経済発展状況の相違等がその要因である。さらに十分な研究期間と研究組織をもって、この課題に挑戦していきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10件)

高橋昭雄「ミャンマー・パテインの精米所経営と市場」『東洋文化研究所紀要』(査読あり) 第167冊 東洋文化研究所、2015年、400-466ページ。

高橋昭雄「比較の中のミャンマー村落社会論 日本、タイ、そしてミャンマー」『東南アジア歴史と文化(東南アジア学会誌)』(査読あり) No.44.2015年、5-26ページ。

高橋壘、(書評)高田洋子著『メコンデルタの大土地所有: 無主の土地から多民族社会へ フランス植民地主義の80年』京都大学学術出版会 2014年 xiii+445ページ、『アジア経済』(査読あり) 56巻2号、2015年、117-121ページ。

宮田敏之「「香り米」をめぐるインドシナ稲作の新展開」『明日の東洋学』(査読なし)(東京大学東洋文化研究所附属東洋学情報センター) 第30号、2013年、24ページ。

高橋壘「南北ベトナムにおける農業の展開 農業停滞期再考」、『東海大学紀要 政治経済学部』(査読なし) 45号、2013年、87-116ページ。

[学会発表](計 7件)

高橋壘、近代精米技術の導入と仏領インドシナ米市場の発展要因再考、東南アジア学会関東例会、2015年5月16日、東京外国語大学本郷サテライト(東京都文京区)

高橋昭雄「比較の中のミャンマー村落社会論: 日本、タイ、そしてミャンマー」、東南アジア学会全国大会、2014年12月20日、立教大学池袋キャンパス5322教室(東京都豊島区)

高橋昭雄「ミャンマー村落社会論構築の試み」、東南アジア学会関東例会、2014年4月26日、東京外国語大学本郷サテライト(東京都文京区)

宮田敏之 "Rice and Middle Income Country's Challenges: A Case of Rice Pledging Scheme in Thailand(発表はタイ語)"

日本・タイ合同タイ研究セミナー *Thai Studies through the East Wind*, 2013年8月24, 25日、チェンマイ大学、チェンマイ(タイ)

宮田敏之「インラック政権下の米担保政策とタイ社会経済の行方」、日本タイ学会、2013年7月6日、横浜市立大学(横浜市金沢区)

高橋昭雄 "The History of the Agricultural Policy in Myanmar and the Changes in the Rural Economy," (国際シンポジウム) *The Prospect of Globalizing the Saemaul Spirit and Its Tasks, the Age of Sharing, the Age of Sharing* 2013年6月13日、嶺南(ヨンナム)大学、慶山市(大韓民国)[招待講演]

宮田敏之 "Agricultural Development and Rice Trade in Siam before WWII," 世界経済史学会、2012年7月11日、ステレンボッシュ大学、ステレンボッシュ(南アフリカ共和国)

〔図書〕(計 10件)

高橋昭雄 「日本の村、ミャンマーの村 共同体とコミュニティー」(奥平龍二他編『ミャンマー：国家と民族』古今書院 2016年) 786(521-535)ページ。

宮田敏之「東南アジア 近現代 I：19世紀半ば～1930年代」(水島司、加藤博、久保亨、島田竜登編『アジア経済史研究入門』名古屋大学出版会、2015年) 390(163 177、319 324)ページ。

宮田敏之「ASEAN 共同体と東南アジア経済の発展」(渡邊啓貴編『リレー講義 世界から見たアジア共同体』芦書房、2015年) 295(71 87)ページ。

統計総局、ゲン ティ タン トウイ(訳) 高橋壘(監修) ビスタ・ピーエス、ベトナム統計年鑑 2013年版、2015年、953ページ。

宮田敏之「東南アジアの主食コメは今? : 食糧自給と不安定化する世界食糧貿易」(東京外国語大学東南アジア課程編『東南アジアを知るための50章』明石書店、2014年) 406(137 143)ページ。

宮田敏之「屋台骨としての農業：しぶとく発展し続けるタイ農業」(綾部真雄編『タイを知るための72章』明石書店、2014年) 448(98-105)ページ。

統計総局、ゲン ティ タン トウイ(訳) 高橋壘(監修) ビスタ・ピーエス、ベトナム統計年鑑 2012年版、2014年、899ページ。

高橋昭雄「『鎖国』と経済制裁 周回遅れの開発主義」(田村克己・松田正彦編『ミャンマーを知るための60章』明石書店 2013年) 388(299-303)ページ。

高橋昭雄『ミャンマーの国と民 日緬比較村落社会論の試み』明石書店、2012年、198ページ。

統計総局、ゲン ティ タン トウイ(訳) 高橋壘(監修) ビスタ・ピーエス、ベトナム統計年鑑 2010年版、2012年、683ページ。

ジ。

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

高橋昭雄 高橋昭雄東大教授のミャンマー農村見聞録①～⑳、フジサンケイビジネスアイ(随時掲載)、2013年4月から現在まで連載中。

高橋壘 一橋大学大学院経済学研究科博士学位申請論文、ベトナム農業・農村の長期的変容と展開 農業近代化の模索、2014、187ページ。

<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/26848>

ホームページ等

高橋昭雄  
<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/takahashi.html>

宮田敏之  
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/To-shiyukiMiyata/>

高橋壘  
<http://economics.pe.u-tokai.ac.jp/academic/takahashi.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 昭雄 (TAKAHASHI, Akio)  
東京大学・東洋文化研究所・教授  
研究者番号：90282706

### (2) 研究分担者

宮田 敏之 (MIYATA, Toshiyuki)  
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授  
研究者番号：70309516

高橋 壘 (TAKAHASHI, Rui)  
東海大学・政治経済学部・准教授  
研究者番号：30453707